

身体イメージ産出力における現代の変容

——「砂浜のレッスン」を中心に——

平山満紀*

1. はじめに 「無意識の意識化」と 「身体的表層意識の活性化」

筆者は「無意識の意識化」をキーワードのひとつとして、冷戦後の世界社会、日本社会における人々の心身の変容を、臨床的な視角でとらえようと試みてきている（平山、1998）（平山、1999）（平山、2004 b）。60、70年代先進諸社会の対抗文化の中で、サイケデリック（サイケ＝魂 デリコス＝顕現する）は本質的な運動であり、理性や規範に抑圧された要素の解放、表現がさまざまな仕方で行なわれていた。これと冷戦後の無意識の意識化は、連続しながらも位相を異にしていると見られる。冷戦構造の終焉、55年体制の終焉と共に、それまで自明視されていた価値や規範が疑われるようになり、その価値に反するゆえに否認されてきた事実や抑圧されてきた感情などが、続々と意識化されていったのである。

さて、コンピュータ化が加速した90年代半ば—Windows 95 発売という画期—以降、特に身体が言葉やイメージの滝に激しく打たれる状況が訪れている。この時期からの無意識の意識化には、価値や規範の変化に由来するのではなく、身体への情報刺激そのものに由来するようなものも多くなってきたような印象を筆者は受けている。「無」意識…この概念には、表面化しないような圧力がかかっている意味合いがある…に潜在していた要素

が意識に顕在化する、という捉え方はふさわしくなく、後述するように、身体的表層意識が活性化してきた、とでもいえる現象が増えてきたような印象をもっている。単なる空想ではない、身体からイメージを生み出す力は一見増しているように見えるが、そのイメージは表面的で浮薄で、大きな意味を人にもたらさないものであり、イメージを生み出す力が真に豊かになっているとは言えないと筆者は見る。本論では、かなり特殊なフィールドでの現象に着目することになるが、その状況を具体的に描きたい。

2. 「砂浜のレッスン」と 「イマジナルな世界」

演出家竹内敏晴が1970年代に創始した非常にオリジナルな演劇的ボディワークに「砂浜のレッスン」がある。本稿では、このレッスンについて簡単に解説して、70年代から現在に至るまでこのレッスンで起きたことの具体的変化を、さまざまな記録に基づいて明らかにし、特にコンピュータ化の時期の特性をとらえ、そしてその意義を考える。

「箱庭療法」とは、砂箱に登場人物や道具を自由に配置してイメージのままに箱庭の世界を創っていくが、「砂浜のレッスン」はそれをなま身の身体でおこなう。室内の三間四方くらいの空間を砂浜に見立てて、他の参加者達が見守る中、一人がそこに足を踏み入れ、まったく自分にわきおこるままに、身体を動かしていくのである。

竹内敏晴自身はこのレッスンを次のように解説

* 江戸川大学 社会学部人間社会学科助教授 身体論、臨床社会学

キーワード：コンピュータ化、身体、イメージ

している。(竹内, 1990)

「レッスンの場にチョークでもテープでもよいが、一辺3~5メートルほどの正方形を描いて「結界」を作る。その中を一応「砂浜」と見立てる。立ち会う人々は正面の一辺の前のみに坐る。

まず一人が線の外で集中し、よいと思ったら結界に入る。入ったところが砂浜である。と言っても四角いサークルの中が、ということではない。立って踏む足の裏にふれる(想像の)砂の広がりはずっと続いていて、目の前に波が打ち寄せる海にもなろうし、はてしない砂漠にもなろう。四角く限られた砂場であることもあろう。いっさい限定せず砂の上に立ち、見廻し、歩いているうちに、その人に現われてくる世界に生きてみるのである。

打ち寄せる波に手を浸していると流れ寄る木の船を拾い上げた人もあり、砂を掘っているうちに箱のようなものの蓋の取っ手を掘り当てて開いてみようとする苦勞したり、探り当てたひもを手ぐってゆくと海の深みへとつながっていたりした例は多い。…花を摘むもの、叫ぶもの、さまざまな世界が、ひとりひとりの集中の深さに従って現われる。勿論、ただ木の床があるだけでなにひとつ起こらずにシラケに終る人もある。」(竹内, 1990, 201~202頁)

出現する深い世界のイメージを、意志を以って持続させるこの作業は、ユングの「能動的想像」に当たる、という人もあり、また「動くメディテーション」と呼ぶ人もある。内容も展開のしかたも、夢とよく似たことが起こるのだが、夢は身体なしに経験されるのに対し「砂浜」で起こることは身体ごと体験されるのである。このような次元の身体を、プロセス志向心理学ならば「ドリームボディ」と呼ぶだろう。

この砂浜には、決して何かを思い描いてから足を踏み入れないようにする。その時に心にある思いを鎮めて平静にし、何か現われ出ることを受けとめる瞑想的な集中だけをして砂浜にはいるのである。そこで人は、自身の予想をも越えたさま

ざまな体験をする。筆者が接した例でも、灼熱の夏の陽の下で、焦ったように捜し物をする……、砂の中からナイフを掘り出してしまう……、砂漠のオアシスで魚を釣る……、など実にさまざまな体験があった。砂浜にいる人には、不思議なことだが、さらさらとした砂の手応え、釣れた魚の虹色のうろこ、ナイフの重みなどは、身体感覚として本当にリアルに実感される⁽¹⁾。そしてその体験は当人にも見守る人にも、強く心に残るものである。

竹内は、砂を掘って真っ暗な洞窟のような中に落ち込み、探っていくと銀色の老人の面に出会う、という自身の根源的な体験も語っている。(竹内, 1997) 竹内氏が語ってくれたことによると、これは「出会いのレッスン」の場面を砂浜に設定したところから始まったそうである。それほど深い次元に開かれているとも思わずに、あるとき竹内氏が集中して砂浜に入っていくところ、突然思いもかけず、異次元のリアリティに入り込み、上記のような体験をしたのだという。そのレッスンに立ち会って、追ってその深い次元に入ってくる人がいなかったために、その次元から戻るのに大変苦勞した、と話してくださった。

哲学者井筒俊彦は、このような深いリアリティの次元を、「物質的・物理的<身体的>リアリティと純粹精神的<心的>リアリティとの中間に位置する第三のリアリティ」と呼んだ。井筒は次のように述べている。「経験的事物とは存在資格を異にし、性質も機能も違うそれらのものが、経験界の事物とはまったく違った仕方で活動し、作用し合いながら、そこに独自の存在連関を描き出していく。それが深層意識の世界像である。」「立場を変えて見れば、この影のような存在者が、実は、経験の世界に実在する物よりも、もっと遙かに存在性の濃いものとして現われてくる」(井筒, 1983, 229-210頁)。A・コルバンは、そのイメージの世界を「イマジナルな世界」と呼び、想像的な「イマジナリーな世界」と区別している(藤見, 1999)。井筒、コルバンらは、シャーマニズム、密教的仏教、ユダヤ教神秘主義、カッパーラー、イスラーム照明哲学など、宗教意識の探求の中で

このように指摘しているが、筆者も、このようなリアリティの次元を砂浜のレッスンで目の当たりにすると、例えば心的リアリティや想像を超えた現実性をもって神が眼前に現われる、というような宗教体験が、起こっても不思議はないと言わざるを得なくなった。

ちなみに、竹内はこのレッスンに後半が続く形の「<砂浜の出会い>のレッスン」とよぶものも行う。それは、「一人だけで自分の知らぬ世界の現われに立会い、そこに生きる…そのありさまを見ていて、それにかかわりたい、あるいはかかわらざるを得ぬ、と思った人がその世界に踏み込んでゆくことがおれば「砂浜の出会い」のレッスンに発展する…」(竹内, 1990, 204頁)ものである。単なる心理テストや心理実験に近いといえる「砂浜のレッスン」よりも、竹内氏によると、後から入っていく人が非常に深い出会いの能力を要される「<砂浜の出会い>のレッスン」の方がよほど困難で、また他者との出会いがあるゆえに意義が大きく、氏も重視しているという。

ここで、体験した当人の報告している「<砂浜の出会い>のレッスン」のひとつの例を示そう。

「四つんばい。…(中略)…と、目の前の砂が気になる。「ふっ」と、ふいてみる。ふっと砂が散る。その散り方が気に入らない。「ふっ」とまたふく。気に入らない。「ふっ」「ふっ」「ふっ」ガリガリとつめをたて、「ふっ」とまたふく。…「ふっふっふっふっふっふっ」たてつづけにふく。「ウウウー——ッ」となる。どんだんほって、ふいてふきまくる。「ふっ!」「ふっ!」

———あ、穴だ。穴があいた!

うわあー ふかーいふかーい 地球の反対まで届いているような——暗いなあ——何というふかーい穴だ! 果てしなくふかーい穴。

「オー———イ」

「オー———イ」

「オー———イ」(中略)

わからない。ただただ全身で呼びかける。からだの中から「オー—イ」が飛び出していく。

と、風の音! その瞬間、わたしのからだは深い穴の中に入っていた。穴の中は広がった。果てが無かった。

風の音はわたしを呼ぶ。わたしを呼んでいる。その音にひかれて、からだは動く。舞う。…風の音のまま。どのくらいの時が流れたろう。私はその音(真木さん)にふれていた。…(後略)」(鳥山, 1985)

「砂浜のレッスン」「<砂浜の出会い>のレッスン」に共通して、正面で見守る人々の場を支える力は大きい。これは竹内も述べているし、筆者の実感でもある。誰にも見守られずに一人で行なうことはまず出来ない。見ている人々の資質、そして特に、能の「後見」にあたるような、場を見守る人物(進行役)のその次元の現実についての経験の豊富さと存在感とが、集中の深さに影響を与えている。

この興味深いレッスンは、竹内以外の主宰する演劇レッスンやワークショップでも行なわれている。報告者の知る限りでは、三好哲司(演出家)⁽²⁾、見田宗介(社会学者)、高田豪、桐山岳大(劇団主宰)が過去に行なった、または行なっている。また筆者自身も行なっている。

それぞれの求めるものの相違により、実はレッスン方法は異なっている。三好哲司、高田豪は、「<砂浜の出会い>のレッスン」よりも「砂浜のレッスン」に重点をおき、「ひとり砂浜」とも呼んでいるという。

3. 砂浜のレッスンにおける身体とイメージの時代的变化(1)

…報告者の体験より

筆者は1983年に最初に砂浜のレッスンを体験して以来、眼前で見た不思議なリアリティに謎をつきつけられた思いがしてこのレッスンに関心を持ち続け、1987年、1992年、1993年、1998年、1999年、2000年、2001年、2002年と、経験する機会を得てきた。(1998年以降は筆者自身が進行役をつとめたレッスンである。)しかし興味深い

ことに、この砂浜で起きることがある時期から変化しているようだ^③。

砂浜で起こることを、ここでいくつかのタイプに分けてみたい。

第一に最も多いのは、単に海を眺めたり、海に石を投げたり、砂山を作ったり、砂を掘ったり、という比較的平凡な出来事である。

第二にその延長上でそれとの境界はないが、深いリアリティが感じられる固有の出来事である。例えば、溝を掘ろうと汗がにじむくらい一生懸命に、苦心して力をこめて手で砂を掻き、遂に溝が開通して満足そうな表情で終えた女性がいた。(2000年20歳女性Kさん)(興味深いことに、彼女はその時便秘の状態で、そのレッスンの後お通じがあったそうだ。)また、砂浜に一人たたずんで遠くを眺め、それからしばらく砂の上に寝転がって空を眺めていたが、パッと立ち上がって砂浜から出てきた男性がいた。(1998年20歳男性M君)彼は元不登校児で独特の孤独の雰囲気のある青年だった。彼の語りによると、人の集まる町を遠くから離れて眺めていたが、そうして一人であることが急に「もういいや」と思えて、人のいる町へと自分も戻ってきたそうである。またある女性は、みぎわで海を見ていた様子だったが、ハッとした様子で、そのあと涙を流しはじめ、泣きつづけた。その背中には本当に孤独で悲しそうに見えた。彼女が後で語ったことでは、ふとした不注意でサンダルを片方波にさらわれてしまって、取り返しのつかないことをしたと悲しかったそうだ。(1998年21歳女性Sさん)(彼女にはある喪失体験があった。)このような、大きな行動はなくても深閑として印象的な出来事も少なくないのだ。

第三に、集中力をもって砂浜に入っても、第三のリアリティの次元に入れず、足元を見ても砂浜ではなくただの床にしか見えなくて砂浜から出てきてしまうことが、1割ほどになろうか、少数だが起きる。

第四にレッスンの方法を誤解して、何かを砂浜でやろうと意図して、作りごとの性格の濃い動きをすることも、1割ほどは起きてしまう。

ところがある時期から、以上に分類できないタ

イプということになるが、たいへん劇的な経験が現われたように筆者は受け止めている。これを第五のタイプにしよう。この出現はイマジナルな世界での、または無意識の意識化における、どのような変化を意味しているのか、不思議に思っている。その例を以下に示してみたい。

2000年 20歳男性T君

T君(大学生)が砂浜に入り、しばらくあちこち歩いていると、突然ひっくり返って「ウワーッツ!! た、たすけてくれ!! だれか! たすけてくれ! ワアアアッ」と叫び、床でバタバタもがいた。

本人も必死、見ている人もビクビクして緊張感に包まれた。

ワアアアッ、ともがいている彼は、すると、やおら、腕をひっぱられたように伸ばして、「ああ、有難うございます! 助かりました! 本当に有難うございます!」と土下座をして、何度も何度も頭を下げた。

そこで砂浜は終わり、彼は結界から出てきた。あまりの意外な展開に、本人も、見ている仲間も啞然とするなか、少しずつ話をしてもらった。

「砂漠を歩いていたら、突然砂に足をとられ、ひきずりこまれて、本当に……怖かった……巨大な蟻地獄にはまってしまった。もがくと余計落ちていった……もうだめかと思ったとき、手をつかんでくれる人がいて、助かった。まだ腕につかまれた感触が残っている。登山服姿で、サングラスみたいなのをかけた、がっしりした男の人だった。見たことはない人で……」

この彼の息づかいや情動は、すごく変化したり深くなったとは言えないけれど、普段よりは深い、という中途半端な感じがするものだった。

筆者が他の人の砂浜と比べて違和感を感じたことのひとつは彼の「た、たすけてくれ!!」というせりふだった。この文字通りの言葉で、何か漫画的な言い方で、真正の恐怖の情動が感じられなかった。

この青年との後日談であるが、この砂浜をみて

私が連想したのは、呑み込む母・ネガティブなグレートマザーと、そこから救い出してくれる、大人の男、というテーマだった。そして安部公房の小説『砂の女』で、主人公の男性が巨大な蟻地獄にはまり、その主の女にとられる、という話も連想した。この青年は、大人の男に成長するために、今グレートマザーの呑み込む力を全力で断ち切ることが課題なのだろう、などと考えた。それで、接する機会があった時には『砂の女』を勧めてみたり、母なるものについてもいろいろと話したが、青年からのこのテーマに関する手応えは意外なほど乏しく、深い切実な問題に触れている感じが本人から感じられなかった。劇的な砂浜とその意味の浅さが不釣り合いに見えて、不思議に思った。

2000年 20歳男性 K君

結果を踏み越え、あちらこちらを歩き回っていたが、何かの存在に急に気づいたようでサッと身をかわし、しゃがみこんで何かの後ろから様子を伺うようにのぞき、パッとその何かの後ろに身を隠すようにした。次に手に銃を持っているような構えでその何かの後ろからのぞきながら銃で撃つようにした。動きはコミカルで軽い。そこからそっと別の物陰のような場所へ移動して、そこからも覗いたり銃で撃ったりする。弾が飛んでも来る様子で、それを慌てたようによけたりした。観ている人たちは喜劇仕立ての西部劇でも前にしているようで、時々笑いももらした。相手を撃てたらしく、しゃがんだまま片手でガッツポーズをしたK君は、砂浜から出てきた。

K君の語りでは、歩いていたら、そこは砂漠のようなところで、ところどころ岩が突き出していた、いつの間にか銃撃戦の場面になっていて、撃ちあいをした。随分焦ったけれどスリルがあって面白かった、という。

2000年 21歳男性 N君

砂浜に足を踏み入れると、自動車に乗り込むような仕草をして、ボタンとドアを閉め、エン

ジンをかけて車で移動するような様子だった。(シートに坐ったような姿勢で、多少の移動をした。)車から降りる仕草をし、歩いて海に行くような様子をし、海を少し見ると、ウォーミングアップのように体を動かして、そしてザバードクロールの真似のような動きをし、しばらく泳ぐと、自分で「30分経過」とアナウンスをしながら向きを変え、逆向きに泳いで戻ってきた。アー気持ちよかった、でも疲れたなどと言いながら、座り込み、近くから何かとて、口に運んだりした。(後略)終始軽いお芝居のような感じで、動作は説明的で、深い情動は感じられなかった。

砂浜から出てくると、饒舌に、起こったこと、見えたもの、したことなどを詳しく語った。

2000年に経験した砂浜のレッスンでは、このような従来とタイプの違う出来事が、13人中3人ほどの割合で起こったので、それをどのように受け止めてよいのか、私は迷った。上述したように、砂浜を見守る人たちの影響は大きいと思える。このような砂浜でのリアリティがこの場に共有されたので、浅くて劇的なリアリティが、続出した可能性は有る。ちなみに、この男性3人ともが、コンピュータゲームに惑溺しており、N君はオンラインゲームで、女性のキャラクターになって他のキャラクター達とさまざまなゲーム世界での社会経験をするに、長時間を費やしていた。T君は自分のウェブサイトの運営のほか、他の人のウェブサイト製作も請け負っていた。

2003年 20歳男性 T君

結果を越えて暫く歩いていると、何か足元の感触がおかしい、という様子で怪訝そうに足を踏みしめてみたり、足の裏を払ってみたりする。身体の皮膚にも何か変なものがついているようで、しきりに腕や、肩や、胸などを手で払う。不思議そうな表情で居心地が悪そうに歩みを進める。何か仕切りに突き当たる感じがあり、それを超えると、次はさらに不快そうに手足を払

う。だが手足は重くなっていく様子が有る。もう一つのしきりに突き当たる様子で、それを越えると、さらに動きは重くなり、不自由になって苦しげに全身を払おうとしてもがく。歩みも重たげになる。さらに仕切りにつきあたり、そこから先を覗こうとして、ギョッとした表情で、慌てて砂浜から駆け出てきてしまった。

語りによると、歩いていると砂だと思っていたものが、砂らしくなく、とてもさらさらしていて、それが足だけではなく全身に降ってくるので不思議だった、そして仕切りが見えて、何があるんだろうとそれを超えてみると、どろどろしたもの溜まった池のようなところで、足にも手にもべたべたとまとわりついてきて、手足が一層重くなる。さらにその横の仕切りの先には何があるのかと乗り越えてみると、ざらざらしたものがまた全身にまとわりついてきて、自分の全身が重く動きにくくなっていった。その横はなんだろうと覗いてみると、油の鍋で、自分が天ぷらで、今から揚げられると気づいて、ギャッとびっくりした。

どうしてこんなことが起きたか、見当がつかない、と言う。

だが、その経験も当人にとって特に印象的だったのではなく、大きな意味ももたらさなかったようだ。ただ、彼がそこから大きな意味をくみ取る機会を得られなかっただけだという可能性もある。

このT君は、特にゲームやパソコンに感溺しているのではない、活動的な大学生だった。2000年には特にゲームやパソコンのヘビーユーザーに起きていた類のことが、2003年にはそうではない人にも起こるようになったのか、事例の数が少ないので確言はできない。

現在、次第に身体イメージ・ワールドは刺激されて、活性化し、井筒俊彦の言う第三のリアリティが発達しているのだろうか。しかし筆者の印象では、近年目にするようになった第五のタイプは、内容の劇的さのわりに重みがなく、イメージ的なかイメージナリーなのか区別が付きがたい

場合もある。第三の次元をプロセス志向心理学では「高次の次元」と呼び、濃密な実在性と独自の自律性を持ち、それをうまく言い当てることがその人にとっての「重要な意味」となる、と考える。(藤見, 1999, 68頁)だが、はたから見て期待するほど重要な意味を、この劇的な経験をした人たちは見いだしていないことが多い。

4. 砂浜のレッスンにおける身体とイメージの時代的变化(2)

…聴き取り調査より

次に、このような身体イメージ・ワールドにおける変化は、筆者以外にも観察されているだろうか⁽⁴⁾。竹内レッスンに十年以上参加した後、自分の劇団を設立した桐山岳大氏に尋ねると(メールによる)、次のようなお答えを得た。

やはり、砂浜のレッスンにおいてリアリティが深まらない、という問題に直面している。例えば28歳でSEをしている男性が劇団にいるが、彼の演技者としての、現時点での課題は、シンボリックな意味で「相手の話を聞けない」ということであり、言葉をきいたときに自分のからだを通さないで、はじいてしまうということ、つまり、コミュニケーションが、自分のからだに染み通らないで、皮膚次元ではじいてしまう、ということである。

桐山氏の言葉遣いを使うと、彼のように「脳内ファンタジーとして、おそらく視覚チャンネルとして」スムーズに進行している砂浜のリアリティでも、身体レベルでは、皮膚をかすっているような、からだの実存と微妙に、ずれた次元で体験している人が現われている。それでは当人にとって本当の「未知」には到達できない。

そしてそれに伴い、桐山氏は砂浜のレッスンの方法に多少修正を加える必要を感じているという。それはスムーズなファンタジーと、身体の実存では動きが起きていないというずれに、当人の限界(エッジ)を見出し、できるかぎりそこにとどまって、エッジ自体を当人に吟味させる、という方法だという。心理学的には介入になるが、そうしなくては表面的なプロセスにしかふれていけない、

ということに気づいて以来行なっている、という。もしかしたらそれが時代的変化への対応なのかもしれない、と述べて下さった。

次に竹内敏晴の主宰するレッスンに約7年間参加している扇谷孝太郎氏に、砂浜で起こる出来事を含めたレッスンの変化について伺ったお話を紹介したい。

それによると、月一回二日連続が基本の「定例レッスン」、これは一度だけの参加も可能なのでメンバーの入れ替わりがかなりあるのだが、以前はそこでも行なっていた砂浜のレッスンは、1998年か1999年を最後にそのようなオープンな定例レッスンでは行なわなくなったという。

「砂浜のレッスン」や「<砂浜の出会い>のレッスン」を定例レッスン以外で稀におこなう場合、竹内氏は「これをやったほうが深まりそうだ」と、「砂浜」の前に、物質が実際にはなにも無いところで、砂を掘る、水をのむ、壁に手を当てるなどのレッスンを臨機応変に提案することもあるという。砂の掘り方がいい加減だと、リアリティも浅く留まってしまう。砂の感触や重さなど身体感覚をよく味わいながら砂を掘るレッスンなどをすることで、集中も深められるからだという。この工夫には、第三のリアリティと身体の関係についての竹内氏の、本質の把握がはたらいていると筆者は感じる。

イマジナルな世界とイマジナリーな世界は連続していて、イマジナルな世界には、思い浮かべ、想像することが中心のイマジナリーな世界とは異なり、全身の身体性が関わっているらしい。身体性の関わりが浅いと、イマジナリーな世界により近くなるということのようだと言筆者は考える。

扇谷氏によると、上掲の2000年 男性Nさんのような人は、このようなレッスンを積んで身体的手ごたえを感じられるようになると変化が大きいだろうと言う。Nさんは海で30分泳いで引き返したことになるが、もし実際に30分泳いだら疲れて、とても軽々とは動ける状態ではないだろうからだ。そのような身体の実感を養うことが、深いリアリティに入る手がかりになると言う。

見田、三好、平山の方法では、砂浜から出てくるタイミングは、当人が何かが終わったと感じたときでもよく、また進行役が「はい、そこまで」と手を叩くこともある。しかし、竹内による「砂浜のレッスン」「<砂浜の出会い>のレッスン」では、砂浜の開始と終結は進行役（竹内氏）がつとめているという。当人が乗り気で、砂浜でいろいろと動いても、リアリティが浅い場合には止めさせられることもある。またリアリティが深まりそうな気配が感じられる場合は続けさせられる。続けるかどうかの判断基準には、息づかいの深さも見られているという。呼吸が深くなることは、リアリティが深まるきざしでもあるという。砂浜の世界の終わりを、踏み込んでいる当人は決める自由をもたず、進行役のみが決めるとは、砂浜の当人にとってはより集中を要請することになる。このレッスン方法は、リアリティの浮薄化に強力なくさびを打つ秀逸なやりかただと言える。

また、竹内敏晴氏自身にも、時代的変化と砂浜でのリアリティについて機会を設けてお話いただいた。

物語が氾濫している現代、子ども達がどこかで見聞きしたような物語の創作を苦もなくするようになっていて、2000年T君の蟻地獄の体験などは、それと同様の時代的影響を受けているのではないか、という。T君は確かに未知の世界に入りかけたが、途中で怖くなって急いで戻ってきた様子だ。もし本当に未知の世界に出会おうとしたら、「助けてくれ」とは言わないだろう。また蟻地獄には一端は飲み込まれてしまうだろう。助け出す登山者風の人物は、急いで空想力により自分で作り出した存在のように感じられる、との指摘をされた。そのほか「砂浜のレッスン」「<砂浜の出会い>のレッスン」の深いリアリティについて話して下さったが、時代的変化を主題とする本稿の範囲を越えることがらなので、別の機会に改めて考えることとしたい。

砂浜のレッスンの変化を体験を積まれた三人の方に尋ねた結果、明らかになったのは第一に、砂

浜で起きる身体的イメージのリアリティが浅くなってきている、という変化は多少なりとも認識されていると言ってよいことだ。(ただし筆者と異なり、「時代の変化」に特に関心をもっていたのではないこの方たちは、問われてみれば変化していると言える、という捉え方をしていた。)筆者が第五のタイプと分類した、劇的で浅い出来事については、本当に増えているかどうかはわからなかった。第二に、竹内氏も桐山氏も、砂浜での身体的イメージのリアリティの浅さを問題化し、それに対処するレッスン方法を生み出している。竹内氏はこのレッスンはメンバーをオープンにした場では行なわなくなった。そして物質なしでその物質の手ごたえを感じるようなレッスンなどを組み合わせ、砂浜のリアリティを深める準備もするようになった。桐山氏もリアリティの浅さに焦点を当てる方法へと、プロセス志向心理学の発想を取り入れてレッスンを変更している。

5. 身体的表層意識の活性化

これらのことから言えることはまず、人々の抱くイメージや意識の「内容」だけではなく、その浅さ、深さ、量的な多さ、意味深さ、意味の無さなど、イメージ世界や意識の「全体としての質」までも、時代によって変化するということである。文化・社会意識研究では殆ど指摘されたことの無いこの点を、本稿は主張したい。

次に、井筒俊彦の言う「第三のリアリティ」「イマジナルな世界」なども、(それが仏教やイスラム哲学研究であることに含意はされているのだが)、時代や社会に関わらず人間に普遍的に現われるのではなく、現われやすさ、現われにくさの変化はあるということである。ただ、しかし竹内氏、桐山氏のおこなっているようなレッスン方法上の工夫により、その現出は可能なのだから、時代や社会により決定的に存亡が影響されるのではない。

第三に、限られた事例からであるが、現在イメージ世界に起きている変化を具体的に捉えるなら、単なる空想ではない、身体からイメージを生み出

す力は一見増しているように見えることがまず挙げられる。しかしそのイメージは表面的で拡散し、深い意味を人にもたらさないものであり、量的に増えても質は貧しいようだ。

第四に、そのことは、イメージを生み出す身体において、深い息、視覚以外のさまざまな感覚の十全な活性、重みや感触などの手ごたえなどが乏しい人が増えてきていることと関連があるようだ。まだ確言はできないが、コンピュータや電子ゲームで身体の手ごたえの喪失した時間を長く過ごすようになったことが背景にあると推察できる。

身体が深い息をし、さまざまな感覚を味わって深くよく使われている場合には身体の深層意識の層から深いイメージが産出されるだろうとも推測される。現在のコンピュータ化はそれとは対極の、身体の表層意識の層のみを刺激しているのではないかと考えられる。

さて、砂浜のレッスンという極めて特殊な場面で観察した以上のような変化が、現代人の他のどのような現象と関連しているだろうか。表象文化、衣服や身体加工など身体表層への関心の高まり、トランス系の音楽やダンスなど、多くの現象との関連が推測されるが、具体的な検討は今後続けていきたい。

〈注〉

- (1) 砂浜にいる間どのようにリアリティが変化するのか、何人かの参加者の感想を、素朴なものだが、以下に掲載しよう。「砂浜のレッスンは、初めてやってみることだったので、どうやるのかよくわからなかった。でもリラックスしたり頭の中を真っ白にして行ってみると、自然に、辺りが砂浜になり、友だちや海で泳いでいる人や、海の家の人まで見えるようだった。声が聞こえたり、本当にその場にいるようだった。意識したわけではないのに、勝手に話が進んでしまった。自分はなんとなく気まづくなって、すると辺りの景色も消えた。」(2001年 20歳男性)
「何も考えないで、ロープで区切った砂浜の世界に入って、起こったことに身を任せることが非常に難しく感じて、砂浜に入って座り込み、思い出浸りといったことしか出来なかった。私には難しすぎたとしかいいようが無い、と思いました。」(2001年 20歳男性)
- (2) 竹内敏晴氏のレッスンに長期間参加したのち、

独自のワークショップや表現を切り拓た三好哲司氏の、「砂浜のレッスン」の体験談を、参加者がウェブサイトで公表している。以下に掲載しよう。(1996年 女性Sさん)

「これは、二日目だということもあり、また、電気を消して天窓から入る薄明かりだけの中でやったせいもあって、みんな一日目よりさらに深い精神集中に入り、現在の心理状態を象徴的に示すような空想を経験したようでした。

切り立った岩壁をよじ登って頂上に上がったが、あまり満足しているようには見えなかった人……。目の前に広がる海を見て泳ぎたくなかったが、水が冷たそうなのでためらっていると、わきの砂の中から温泉が湧き出ているのに気づき、その砂の中にもぐりこんで気持ちよくなったという人……。足元に巨大なアリ地獄の穴のようなものがあり、立っているとずるずると落ちこんで行きそうになるので、穴のふちに沿って必死で走り回っていた人……。空中に、この世界と別世界とをしきる膜が立ちふさがっているの、その膜の小きなわれ目を一生懸命おし広げて向こうの世界に入って行こうとした人……。幼時に帰り、家族が自分一人を家の中に置き去りにしてどこかへ行ってしまったので、泣きながら戸をたたいていた人……。

女性はシクシク泣きながらやっている人がかなりいました。心の奥底にためこまれていた悲しみ、無力感などが、そういう深い集中状態に入ることによって表面化してきたのでしょうか。

友ちゃんは、前日激しく泣いてエネルギーが解放されたからか、砂浜の松の木陰で涼しい風に吹かれているかのように、とても気持ちよさそうにごろんと寝ころんでいました。

わたしは「砂浜」に入ってみると、全く何の空想もわいてきませんでした。

これは困った…と目をつぶっていると、体のあちこちが凝っていてエネルギーがとどこおっているのを感じたので、その凝っているところがほぐれるような形に体を動かし始めました。

そのうち声も出たしく泣いたので、「ウー」とうなりながらやっている、だんだんノッてきました。「フーッ、フーッ」「キエーッ」「ギャーッ」「ブルブルブル」「シャーッ、シャーッ」「ムナムナムナ」というような、わけのわからないわめき声がいっぱい出て、全身が狂ったように激しく動きまわりました。

しばらくして声と体の動きがおさまると、長年のしこりがとれたような、すっきりした感じがしました。

後でみんなの感想を聞くと、得体の知れない原始的な生き物のようでショッキングだったと言っていました。」

(<http://www1.ocn.ne.jp/~yukosite/clopwml.html>)

このような体験の文章化は、残念なことにあまり行なわれていないし、公表もされていない。本報告が試みているような、砂浜のレッスンでの身体的イメージの時代的変化の裏づけになる客観的なドキュメントは少ないのである。

さて、このSさん自身の例は、終始内的感覚に焦点が当てられており、第三のリアリティの顕現が不十分に終わっているという印象がある。Sさんが紹介している他の参加者達の例のほうが、第三のリアリティの顕現が感じられる。

また、筆者が問題にしている時代的変化についてだが、これは1996年のレッスンだが、劇的で浅い第五のタイプは見られないようである。

- (3) 以下筆者の直接接した事例を紹介する場合、その当人が特定されないように本名は揭示しない。当人には、自分の事例を公表することについての了承は得ていないが、それは、砂浜で起こる出来ごとは、通常の当人の意識の次元とは異なっており、社会学や心理学などでの通常のケーススタディには秘匿が要請されるプライバシーとはずれがあり、言及された当人もこれで不愉快な思いはしないだろうと判断するからである。
- (4) この聴き取りでお世話になった、扇谷孝太郎氏、桐山岳大氏、竹内敏晴氏には、示唆に富むご教示を下されたことに、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 藤見幸雄, 1999『痛みと身体心理学』春秋社
 平山満紀, 1998「現代市民社会における病と癒し」青井和夫・高橋徹・庄司興吉編『福祉社会の家族と共同意識』梓出版社
 平山満紀, 1999「現代市民社会と無意識の意識化」青井和夫・高橋徹・庄司興吉編『市民性の変容と地域・社会問題』梓出版社
 平山満紀, 2004a「からだところのいま」(成実弘至氏との対談)『化粧文化44』ポラ文化研究所
 平山満紀, 2004b「情報化と身体=「人間」の変容」庄司興吉編『情報社会変動のなかのアメリカとアジア』彩流社
 井筒俊彦, 1983『意識と本質 精神的東洋を求めて』岩波書店
 ミンデル, アーノルド 高岡ほか訳, 1984→1996『ドリームボディ・ワーク』春秋社
 竹内敏晴, 1990『「からだ」と「ことば」のレッスン』講談社現代新書
 竹内敏晴, 1997『ことばとからだの戦後史』ちくま学芸文庫
 鳥山敏子, 1985『からだが変わる 授業がかわる』晩成書房

(ひらやままき) e-mail: hirayama@edogawa-u.ac.jp